

ヴァイマル共和国における「大戦の語り」と世代間抗争

——「前線世代」の戦争文学——

村上宏昭

1 悪魔の相貌

人類史上初の機械戦・総力戦が展開され、空前の規模での大量殺戮を可能にした第一次世界大戦は、戦後の国際政治の情勢を大きく転換させたのみならず、戦前のヨーロッパ社会における伝統的な文化的規範や価値観の崩壊をももたらした。とくに機関銃や戦車、迫撃砲や毒ガスなどの大量殺戮兵器によって「死」が日常と化した西部戦線の塹壕では、大戦前に育まれてきた諸々の市民的価値観がいち早く浸食され、それに伴い旧来の言語体系も、とりわけ市民層出身の兵士たちには、前線体験の描写に不資格だと意識されるようになる^①。当時の前線兵士が書いた手紙を読めば、彼らがいかに自己の体験の言語化に困難を覚えていたか、その様子が赤裸々に綴られているのが分かるだろう。たとえば一九一八年七月に西部戦線で戦死したあるドイツ人学生は、文字通り「言語に絶する」戦場の光景を次のように表現している。

「数日の行軍の間、目に映るのはただ荒廃の惨状のみだった。

……中世は悪魔に恐るべき醜貌を与えた。誰が悪魔を描きうるだろうか。この掘り返され攪乱された地形、死んだ森林、十字架また十字架——それらはすべて悪魔の醜い相貌にある一つの表情だ^②。

誰が悪魔の顔を描きうるか。——こうした「表象の限界」をめぐる問いは、「暴力の世紀」(アレント)としての二〇世紀を経験した現在では、とりわけホロコーストの悲劇を軸に展開されているが、伝統的な歴史のナラティヴへの挑戦という点では、まさに第一次世界大戦での前線体験こそ、この種の問題を初めて深刻な形で提起したものであった。だが結局、当時は戦争の災禍によっても、少なくともドイツでは歴史叙述の方法が根本的に再考されるまでに至らなかったため、ドイツの歴史家はホロコーストの場合と同じく、前線兵士が直面した悲惨な体験を語りえず、その迫真の力を持つ描写は詩や文学の手に委ねざるをえなかった^③。

しかも敗戦国ドイツでは、大戦の想起は濃厚な政治的意味合いを帯び

ることになり、それだけに戦後社会ではこの戦争の記憶をめぐって激しい攻防が繰り広げられることになる。こうした状況の下、実際に戦地へ赴いた元兵士や将校、とくに比較的若年で召集された教養ある青年——いわゆる「前線世代」Frontgeneration（およそ一八九〇～一九〇〇年生まれ）——を中心に、自身の戦場での体験を、文学の形式を借りつつ戦後の社会に伝達しようという試みが現れる。

本稿では、この元青年兵士による「前線体験の語り」を分析することで、彼らの描く「悪魔の相貌」が、ヴァイマル期ドイツの社会的・思想的变化の中でいかなる変容を被っているか、その差異の様態を検証することが目的となる。その際、これまでほとんど注目されてこなかったが、この変容を規定した背景の一つとして、ヴァイマル中後期に表面化した世代間抗争にも議論の焦点が当てられるだろう。だがその前にまず、本稿の問題意識をより明確にするためにも、ここであらかじめ留意すべき点をいくつか述べておくのが至当だと思われる。

まずこれらの戦争文学では、叙述が前線での個人的体験に限定されていたため、客観的な史料との照合による記述内容の検証可能性は、最終的に排除されていた。戦争文学の多くは、前線体験を「読者に対しありのままに描く」こと、戦争の「印象をできるだけそのまま紙に持ち込む」ことを意識して執筆されたものの、このように叙述の客観的検証が不可能である場合、その妥当性・現実性が判断される基準は唯一、当時の公衆がその現実効果を適切なものとして受け入れるか否か、つまり読者層が戦場の描写を「真実らしい」と見なすか否か、という点にのみ依拠する⁷⁾。従って、「未曾有」の前線体験を描写する際にも、それが他者にも共感可能となるには、何らかの形で当時の社会に認知された語りの仕方に沿う必要があった。

次に指摘できるのは、これと関連することだが、これらの戦争文学の叙述によって、前線体験の「典型」ないし「単一性」というフィクショナルが構築されたことである。実際には、大戦に召集された男性は多種多様な軍務に従事しただけでなく、病気や負傷、捕虜生活など、千差万別の仕方でも戦争を体験していた⁸⁾。それらの雑多な体験から何を「例外」として排斥し、何を「典型」として採用するかを決定するのは、「実際に何が起こったか」ではなく、「何が起こったと公的に認められるか」という問いに他ならない。ヴァイマル期に成功した戦争文学は、多かれ少なかれこの問いに正確な回答を提供することができたものと推定される⁹⁾。

最後に、この「前線世代」の成員が、帝政期における「ドイツ青年運動」の担い手たちと同じ年齢集団に属していたことも指摘しておこう。かつてヴィルヘルム社会に反旗を翻し、『若き世代の反乱』が新たなライヒを創り出す¹⁰⁾という「青年神話」を育んだ彼らが、年長者を排除した形で「前線世代」というアイデンティティを構築したのは偶然ではない。上述のように前線体験そのものの統一性が虚構であるにもかかわらず、戦争という経験を軸の一つの世代アイデンティティが形成されたのは、旧来の青年神話が戦後も強力に持続していたからである¹¹⁾。それゆえ前線世代による大戦の語り注目する際には、こうした青年神話の伝統にも目を向けておかねばならない。

2 「死の差別化」から「死の平等化」へ： W・フレックスとE・ユンガー

言うまでもなく第一次世界大戦の衝撃はひとりドイツに限らず、全三

ヨーロッパ規模で波及したものであり、それだけに戦後はヨーロッパ全土で「一九一四年の世代」に関する言説が大きな比重を占めるようになる。¹²だが一方、この言説の表出形態は各国の伝統にも制約されており、とりわけドイツでは強力な青年神話の伝統から、「世代」ないし「青年」の言説がヴァイマル期の公的論議や政治運動で一際目立った役割を担わされる。¹³既に大戦前から見られたドイツにおける「青年」の宗教的色彩は、一九一八年以後には「戦争の神話化」とともに急進化して明確な政治性を帯び始め、「政治の青年化」と「青年の政治化」というパロールが、一つのスローガンとしてヴァイマル社会の公的領域で広く叫ばれるようになった。¹⁴

こうした青年神話の背景としては、一九世紀後半のヨーロッパにおける「青年期の発見」、また立法や教育を通じたその保護と規律化の進展が挙げられるが、とくに急激な近代化を経験したドイツでは、ラガルドやランゲベーンを始めとする文化批判から青年礼賛の声が早くから現れており、既に戦前には「ホーアー・マイスナー大会」（一九一三年）でその頂点に達する、ドイツ青年運動へと結晶化していた。¹⁵「老いぼれたちの精気なき慣習や醜悪な因習の掟」を捨て去り、「みずからの生を形成する」こと、つまり「青年の自立」や「青年文化」の確立を目指したこの運動では、青年期を成人への単なる過渡期と見るのではなく、それに固有の「美」や「価値」を強調するような言説が生み出されるようになる。¹⁶

一方で、ヴィルヘルム社会に対するこの青年の反乱が、「民族」ないし「祖国」への強烈な信仰に貫かれていたことも忘れてはならない。当時の青年組織が一時的ながら団結したあのホーアー・マイスナー大会が、ライプチヒ解放戦争百周年記念祭に対抗して開催されたのも、「父

たちの英雄的行為を大げさな言葉によって横取りし、自分で行為しようという義務を感じない」ような、「安っぽい愛国主義」を拒否するためであり、「万一の場合いつでも生命を賭して自民族の権利を擁護する準備がある」、青年の「新鮮で純粋な血を祖国に捧げる」という意識は、この大会の主催者にとっても青年の反抗を正当化する根拠と見なされていたのである。²⁰

それゆえ青年にとつて一九一四年に勃発した大戦は、「英雄的行為」を通じて祖国信仰を「確証」できる機会に他ならなかった。ヴァンダーフォーゲルや自由ドイツ青年、さらにアカデミック義勇団も、当時の青年運動団体はほぼ例外なく戦争の熱狂に巻き込まれ、ヴィルヘルム社会に対する敵意もひとまず脇に置いて、「最後の一人に至るまで祖国防衛のために」戦うことを宣言する。²¹もちろんこうした熱狂は、兵士の間では戦闘が塹壕戦の様相を呈してくるにつれて急速に冷めていくものの、塹壕で幻滅が広がるまさにこの時期に、銃後では「世界に冠たるドイツ」を唱和しながら敵の戦線を突破する「若き連隊」、「騎士道精神と英雄的戦士という理想」を体現した、あの「ランゲマルクの青年」神話が構成されることになる。²²

この神話が成功したのは、戦前の青年運動が担った古い理想としての「英雄」や「犠牲」といったトポスが、前線では塹壕戦によって浸食された後も、なお銃後の社会で息づいていたからである。実際、神話形成の起点となったランゲマルクの戦況報告は、他ならぬこうした銃後の雰囲気念頭に置きつつ執筆されており、結果としてこの「ランゲマルクの青年」も、新たな理想を体現するというより、むしろ「その利用者が単にこの伝統を刺激することに甘んじる」²³という類の神話にとどまっていた。²⁴

銃後で読まれた当時の戦争文学にも、こうした青年運動以来の旧理想的英雄の形象が正確に反映されていた。たとえば戦時中に出版され、一九一九年までに一三万部を売り上げたと言われる戦争文学の代表作の一つ、『二つの世界の遍歴者』(一九一七年)では——著者ヴァルター・フレックス(1887-1917)自身が「青年運動の詩人」²⁵とも称されるように——ニーチェのツアラトウストラやゲーテのヴィルヘルム・マイスタ、そしてキリストをすら彷彿とさせる、カリスマ的な英雄としての青年兵士という、典型的に教養市民的な理想の権化が、エルンスト・ヴルク(1894-1915)なる実在の人物の姿を借りつつ、代表Ⅱ表象されている。²⁷

この英雄の死、「ドイツの将来のあらゆる栄光と救済」をもたらすはずの「ヴァンダーフォーゲルの精神」を「純粹かつ明朗に体现する」者であったヴルクへの戦死は、まさに世紀転換期以来の青年神話を確証するものであった。実際、ヴルクへの遺体に対面したフレックスは、死人の顔のうちに、選ばれた者のみが持ちうる「偉大なる魂」の刻印を見出すことになる。

「そして僕は彼の前に跪き、繰り返し繰り返し、その誇り高く若々しい顔が休日のように静かな安らぎのうちにあるのを見て、自分の惨めつたらしさを恥じた。……偉大なる魂には、死は最も偉大な体験なのだ。……神と語る者は、もう人間には語りかけない」。

「神と語る者」のみに許される、「最も偉大な体験」としての死。このような「戦死者の選民性」³⁰、つまり「死の差別化」と「死のカルト」と

いう契機は、このテクストでは戦前の青年神話と密接に絡み合う。「純粋なまま成熟すること」(Rein bleiben und reif werden)。——これこそ最も美しく、かつ最も困難な生き様だ³¹。こう述べたのは、みずからの戦死を通じてこの生き様を実践し、「休日のように静かな安らぎ」を得たヴルク自身である。彼にとつては、ただ「行為」と「死」こそ、青年を「成熟させ、かつ若く保つ」ものに他ならなかった。³²

このように大戦中も旧来の青年神話をそのまま反復する『二つの世界の遍歴者』が、当時の読者に「真正な、まったく自分の経験の記録として知覚された」のは、「自身の体験と並んで集合的(無)意識のストック、つまり文学のモチーフ、あらゆる種類のイデオロギー、宗教的な考え方のパターンなどが著者の材料に」なったため、端的に言えば銃後社会になお存続する伝統的な価値規範がそこに反映されていたからである。『教養』に由来し、自主的な判断能力を持つ人格の自由な展開」という教養市民層の「古典的理想」は、大戦を通じて銃後の市民的公共性の中で生き続けていたのであり、この伝統的な文化的価値規範が動揺の兆しを見せたのは、後述のように革命からヴァイマル共和国初期にかけての危機の時代、つまり街頭という公共の領域で政治暴力が荒れ狂うさなかのことであった。³⁴

そしてまさにこの時期に、「大戦の語り」の口調にも一つの変化が生じる。「戦争文学のマルティン・ルター」³⁵とも称されたエルンスト・ユンガー(1895-1998)の問題作『鋼鉄の嵐の中で』(一九二〇年)である。この作家は、「人類史上最も野蛮な体制をもたらしたあのドイツ……に抵抗し」た、「最後の巨匠」と評される一方、「新しいものに対する近代主義的崇拜のファシスト的な変種」である「反動的モダニズム」の一人として弾劾されるなど、今日なおその評価が両極に分裂している

ように、現代ドイツの思想界に多大な影響を残したにもかかわらず、ナチズムに対する思想的関係はきわめて両義的なもので、その一義的な確定は困難と言わざるをえない。それゆえここでは、そうした視点はひとまず括弧に括って、ユンガーによる大戦の語りを同時代の歴史的文脈に即して考察するにとどめたい。

結論を先取りして言えば、ユンガーが『鋼鉄の嵐の中で』において用いたナラティブには、もはやフレックスのような「死の差別化」は見られず、むしろ「休日のように静かな安らぎ」とは無縁な、死の凄惨さが語られる。そこには、「魚のように腐った肉がちぎれた軍服から緑白色に光り」、「空っぽの眼孔とこげ茶色の頭蓋骨」を曝け出す、「不気味な死の舞踏の中で硬直した」無数の死体があり、「敵と顔を見合わせることなく」経過する戦闘や、突然の榴弾の飛来でわけもなく「一三名の犠牲者を出す」情景がある。この近代テクノロジーを駆使した「物質戦の壊滅的作用」を前に、兵士たちは「戦争のまったく新しい形に適応しなければならなかった」結果、時として戦友の死すら数量化される。「僕と一緒に出撃した一四名のうち、たった四名しか帰ってこなかった」。これが、ユンガーを「意気消沈」させた戦闘の語り口調である⁽³⁷⁾。

このような語りでは、ヴルヘのように知性やカリスマによって石を「手の中で水晶」⁽³⁸⁾ 変えてしまう英雄的個性や、死へといざなうその主体的な行為のための余地は残されていない。そこで生と死を分けるのはひとえに「偶然」のみであり、その意味で兵士だろうが、「窪みの中で落ち葉を探していた八歳の小さな少女」⁽³⁹⁾ だろうが、死は平等に降りかかる。まさに砲弾の嵐の中でこそ、対象を選ばないこの「死の平等化」は、完全な形で実現されるのだ。

「お前は塹壕の中で小さくなつてうずくまり、情け容赦もなく、めくら滅法に破壊してやろうという意志に曝されていると感じている。お前は自分のあらゆる知性・能力・精神的身体的な長所が、意味のない、ばかげたものになったと気づいてぎよつとしているだろう。まあ、お前がそう考えているうちに、鉄の丸太ん棒がドンとあがつて、お前などすっかり跡形もなく木っ端微塵にしてしまうかもしれないがね」⁽⁴⁰⁾。

こうした語りの変化は、『鋼鉄の嵐の中で』が出版された当時、つまりヴァイマル初期にドイツの市民的公共性が直面していた社会状況に目を向けなければ理解できない。ここでは、暴力装置が国家の手を離れることで、街頭を舞台とした政治暴力が市民の眼前で初めて大規模に展開される、いわゆる「暴力文化」Gewaltkultur と呼ばれる状況が現出していたのである。

一九一八年一月のドイツ革命を境に、社会民主党の新政府に共産主義革命の鎮圧を望む軍部との「打算的な結婚」(エリアス)、いわゆる「エーベルト・グレーナー協定」の締結を強いた、国家における独占的軍事力の欠如という事情、そして連合国の支持すら得た右派の準軍事組織「義勇軍」Freikorpsの活動などにより、ヴァイマル共和国はその誕生の間から、「国家暴力が弱体化し、私兵や民間暴力が復活」するという「歴史の逆転現象」に直面していた⁽⁴¹⁾。たしかに街頭という公共の空間を政治的意見の表明の場として利用することは、既に戦前の社会民主主義者によって知られていたが、この革命期に初めてブルジョア市民層が街頭に繰り出したことで、そこで革命的な労働者大衆との衝突が引き起こされることになる⁽⁴²⁾。

カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルクの暗殺、さらにエルツベルガーやラーテナウなどの要人暗殺など、明確に政治的意図を持った過激派の暴力行為もさることながら、一般市民の眼前で頻繁に繰り広げられていたのはむしろ、治安権力ないし義勇軍とストを行う労働者大衆との、なし崩し的に発展していく流血の騷擾であった。たとえばカッパ一揆に続く一九二〇年三月の大規模衝突では、ひと月に及ぶ「軍と労働者との戦争を思わせる戦闘行為」によって、ザクセン地方ではハレだけで二七人の兵士が死亡し、労働者を含む一般市民からは一〇〇人以上の犠牲者を出すことになった。その際、店のレジに立っていた女性が苛立った兵士の無許可の発砲で命を落とすこともあれば、別の老婦人などは装甲車からの無差別射撃で、さらには孤児院の婦長も子供らと教会へ向かう途中に狙撃されて死亡するなど、住民が軍と労働者大衆との衝突に巻き込まれるケースも相次いで発生していた。⁴³

こうした街頭での政治暴力の行使による、死の恒常的な脅威と日常生活への浸透は、ドイツの市民的公共性が伝統的に育んできた価値規範を徐々に浸食し、やがて「ヴァイマルからの離反を可能にし、かつ国家社会主義の暴力支配を刻印つけた新たな価値の地平」、「新しい暴力パラダイム」を確立するに至る。⁴⁴先に見たユンガールの「死の平等化」の言説は、まさにこの暴力文化が生成していく過程のさなかで、紡ぎ出されていたのである。

たしかに彼の戦争ナラティブ、とりわけ近代テクノロジの自律化と人間疎外の描写には、一九世紀以来のロマン主義的な文明批判との連続性が明白に認められるし、後の著作にはソレル（1847-1922）のような「暴力の神話」論と共通する言説も少なからずある。⁴⁵だが、この種の言説が——戦時中ではなく——他ならぬヴァイマル初期に、戦争の語り

と融合して一つの文学作品へと凝集されたのは、「戦後期の精神に対して戦争体験を擁護する」⁴⁶ためというより、当時の市民的公共性が直面していた街頭暴力の嵐と、その暴力を通じた戦前の価値規範の動揺によって、別のナラティブが要請されたという面があったことも見逃されるべきではない。

とはいえ戦前以来の伝統的規範はなお、当時は完全に覆されるまでに至っていない。上の一九二〇年三月の衝突では、市民層も労働者も互いの犠牲者を「戦死者」*Gefallenen*と呼び合い、ブルジョア系新聞は彼らを、「平穏と秩序を守るため」に「義務」を果たした「英雄」として顕彰している。⁴⁷これに対応して『鋼鉄の嵐の中で』でも、砲弾の嵐の中で戦場にとどまり戦い続ける「義務と名誉」の感情という形で、前線兵士の英雄性を確認するための余地が残されていた。⁴⁸この前線兵士に備わる英雄性そのものへの挑戦は、前線体験を欠いた若い世代が新たに登場するまで待たねばならなかった。

3 「戦後」の台頭：E・M・レマルクとE・グレーザー

一九二九年に出版された、エーリヒ・マリア・レマルク（1898-1970）の『西部戦線異状なし』には、以前の戦争文学ではほとんど見られなかった情景が、この小説を構成する主要なテーマの一つとして、前面に押し出されている。主人公パウル・ボイマーが休暇で前線から帰郷した際に、銃後の世界に強い違和感を覚えるシーンである。

父を始め戦場の話を聞きたがる銃後の人々に対し、「はかばかしい」と感じ「涙が出そうになる」ボイマーにとって、故郷は既に「まるで違った世界」になっていた。息子の死を伝えられた戦友の母親の姿も、ボ

イマーのように「あんなにたくさんの死人を見た者には、たった一人ぐらしい人間の死んだのを、こんなに悲しむ心持は、もうはつきりと頭に入つてこない」。このように戦争で変わり果ててしまった彼は、最も理解を示してくれるはずの妻の母にすら、「決しておわかりにはなりませんまい」と自身の体験を語りえず、やがて自分を苛み苦悶した挙句に、「僕は決して休暇をもらつてくるのではなかった」と、帰郷を後悔するのである。⁴⁹

突撃による息子の戦死を知り、「それは彼の望みだった」と喜ぶ「ドイツの母」を描いたフレックスや、「晴れやかなドレスに身を包み、テニ斯拉ケットを抱えて談笑しながら通り過ぎる三人の少女」の姿を、休暇中の「生活の輝かしい暇乞い」と見たユンガーなど、銃後との齟齬や軋轢をほぼ排除していた戦争ナラティヴに対して、こうしたレマルクの故郷の語りは著しい対照をなす。このような前線と銃後の断絶を語るナラティヴが浮上した背景には、大戦中に国内で幼児期を過ごしたいわゆる「戦時青年世代」Kriegsjugendgenerationが、ヴァイマル中後期に至つて、遂にみずからの言葉を発し始めたという状況があった。

世紀転換期のベビーブームの中で生を受けたこの世代は、一九二〇年代に学業を終えて社会へと進出してくるが、当時ドイツ経済はちょうどハイパーインフレに見舞われており、労働市場が極端に縮小・停滞していた。そこへこの年齢集団が殺到し、さらに労働力が供給過多に陥つたために、失業者人口で若者の占める割合が急激に膨張することになる。⁵¹

たとえば全男性人口における一四〇二〇才の男性の割合は、一九一〇年の一一・九パーセントから一九二五年には二二・九パーセント、同じく二〇〇二五才の割合も八・七パーセントから二〇・一パーセントと増加し、それに比例して労働可能人口も一九一〇年の一八五〇万人（全人口

の六三・三パーセント）から一九二五年の二二九〇万人（同七一・一パーセント）に上昇している。一方で、一九二六年には一四〇二〇才の失業者は二七万人強であり、これは全失業者数の一七パーセントを占めていた。相対的安定期には状況がやや改善されるものの（一九二七年で九・五パーセント）、この若年層の失業傾向はヴァイマル時代を通じて基本的に途絶えることなく、世界恐慌の到来によってさらに拍車がかげられることになる（一九三一年に二六・三パーセントで、その数は七〇万人にのぼる）⁵²。

たしかに戦地に赴いた年長者は大戦中に大量の戦死者を出しており、とりわけ一九二五年に三〇〇三五才だった男性（前線世代）の場合、一九世紀末の出生率増加にもかかわらず、その人口は一九一〇年当時の同年齢の数値以下へと減少している。⁵³ しかも労働可能人口に関しては、ここからさらに戦傷によつて労働不能になった男性の数も差し引かれねばならない。とはいえ、この人口動態の変化に比例して、大戦後に雇用の間口が拡大したとは考えにくい。

というのは、一九一八年初頭には二一〇万人、同六〇七月には二五〇万人もの兵士が、内地に戻つて戦時経済部門の仕事に従事しているように、国内の職場は戦時中ですら（女性とともに）兵士の間で確保される傾向があったからだ。たとえば二万人の従業員のうち一万二二一四人が徴集されたある鋳業会社では、一二九七人が戦死したものの、休戦の際には既に五四七七人が元の職場に戻っている。さらに休戦後は雇用者側が元兵士たちへの仕事の斡旋に努めており、彼らのほとんどは短期的に失業の憂き目を見たものの、最終的には何らかの職に就くことができたと言ふ。⁵⁴

このように、インフレによる労働市場の狭隘化に加え、前線世代を含

めた元兵士たちが市場を占拠していたために、戦時青年世代は社会に進出した時点で、先の人生の見通しがほぼ閉ざされていたと言つてよい。こうした窮状から、この世代は政治的に急進化して左右両極へと分裂し、街頭における政治暴力のおもな担い手となつていく。たとえば一九二一年の「三月行動」では、治安権力に反抗した群集のおよそ四分の一がこの世代の男性だったが、彼らは既に相対的安定期にはザクセン地方で有名な暴徒の半数を構成し、さらに世界恐慌を経たヴァイマル末期に至ると、街頭暴力の推進役となつたナチ党の突撃隊で半数以上を占めるようになった。この戦時青年世代を中核とした暴力はやがてその性格を変質させ、もはや治安権力とのなし崩し的な騷擾ではなく、政治的に敵対する党や他の組織に対し計画的・意識的に衝突を惹起させるといふ、戦前の規範にはないまったく新たな行動パターンを確立することになる。⁵⁶

エルンスト・グレーザー(1902-1963)の『一九〇二年生まれ』(一九二八年)は、戦争に召集されなかつた若年層の中で最年長の年齢をタイトルに冠しているように、まさにこの戦時青年世代の声を代弁したものととして、出版直後から大きな反響を呼んだ文学作品である。とくにその文学的意義に関しては、当時の反応はおおむね好意的であり、たとえば、「敏感な年頃に戦争勃発の熱狂の眩暈を体験し、思春期の迷妄が終つたまさにその時期に……全世界の崩壊に立ち会わねばならなかつた」、「我々一九〇二年の世代」の「現実」を描いたもの、あるいは「戦争の中で成長し、社会という世界の形が崩壊したその時に自意識を自覚めさせた」、「いわゆる戦後世代の運命における尋常のなさ」を語つたもの、さらには比喩的に、「単純だが稀にしか証明されない方程式を再び解く」ような作品だととして、一定の評価が与えられている。⁵⁷

その理由はまさに、この作品が「La guerre - ce sont nos parents (戦争——それは僕らの親のことさ)」という——その後頻繁に引用される——言葉を扉に掲げつつ、大戦中における銃後の青少年の日常と、前線で戦う父への反感の芽生えを語っていたからに他ならない。実際、当時の読者に「一九〇二年の世代」こそ「年長世代の犠牲者」だという意識を呼び起こしたように、この書では主人公が前線からの父の声、「青年が我々の心配を侮蔑し自分の頭で生きていこうとするなら、……その未来のために父がこの戦場で生命を危険に曝す価値はない」という、押しつけがましい「英雄的感傷」に「びっくり仰天」し、反発する心情が克明に描かれている。

「これが前線からの声なのだ。これが、かつては僕らの父であり、だが今や、数年来僕らから遠く離れ、見知らぬ人となり、恐ろしげで、偉大で、強大で、重苦しい影を持った、何か記念碑のように息苦しい、あの男たちの声なのだ。あいつらは僕らのことで、何をまだ知っているというのだ？あいつらは、僕らがどこに住んでいるか知っている。だけど、僕らがどんな様子で、どういう風に考えたか、それをあいつらはもう知らないのだ」。⁵⁸

前線世代を含む年長者へのこうした反抗の言説が、当時の戦時青年世代が陥っていた社会的窮状を背景に生み出されたことは言うまでもないが、当然ながらそれは、前線世代からの反発をも招くことになつた。いわく、「敵は今までのように我々の前にいるだけでなく、もつと強力でもつと危険に我々の背後にいる」が、実は彼らは「我々の前にまだ居座っているあの老人どもと何ら変わらない」、この「我々が一九〇二年生

まれとして体験した青年」にも、「我々は闘いを宣告する」だろう。あるいは、今日の青年の「即物性」に潜む「英雄主義」は、「かつて若い世代を戦争へと追いやった」ものと同じであり、それゆえ彼らは「新しい青年」などではない。さらに、「戦後世代」は「戦争世代」のような「困難な体験を背負っていない」ために、「瞑想熟慮も深化」もない、それゆえ彼らの「行動主義は犠牲を覚悟したものというより、遊び半分によつて嬉しがるもの (spielerische Tatfreude)」でしかない、云々……。

このように世代間抗争が激しく繰り広げられるまさにその渦中で、『西部戦線異状なし』は執筆されていた。先に見たレマルクにおける前線と故郷の断絶の語りは、こうした戦時青年世代による反抗の言説と、それに対する前線世代の反発なしには理解できない。実際、前線世代にとつて『西部戦線異状なし』は、反戦小説などではなく、「我々の世代の名誉挽回」であり、その成功は「我々の日々で初めての慰み」となるものであった。トラー (1893-1939) の次の言葉もまた、この「名誉挽回」された前線世代の快哉の叫びに他ならない。「ドイツの歩兵はこうやつて塹壕で生きていたのだ。フランスの歩兵も、イギリスの歩兵も」。

レマルク自身、あるインタヴューの中で、「戦争は事実として前提にされている」ものの、みずからの本を戦争小説としては「不完全」だと認め、ただ「我々の世代がそれ以前やそれ以後 (の世代) とは違うように成長した」ことこそ、「物事の核心」であると述べている。彼が望んだのは、あくまで「戦争によつて破壊された一つの世代」の物語を書くこと、言い換えれば、「ちよつど生命の鼓動を感じ始めていた決定的な年齢で死と直面」したために、「他の世代よりも死や苦闘、そして恐怖の四年間から戻つて、労働や進歩という平和な場へと向かう道を作るのが困難だった、一つの世代への理解を自覚めさせる」ことであり、それ

ゆえ彼が戦場で「ひつきりなしに起こつていたような、典型的・標準的状況をできるだけ描いた」意図は決して、「政治的でもなければ、平和主義的でも軍国主義的でもなかった」のである。

たしかにここではレマルク自身の政治的意図はもとより、彼が自分で描写したような戦争体験を実際に味わつたか否かという問題も、さほど重要ではない。注目すべきはむしろ、インタヴューの中で彼自身が、「私の本で描かれた状況は真実であり体験されたものです」と強調し、インタヴューであるエツゲブレヒト (1899-1991) もすぐさま、「もちろん。それは私自身の思い出から知っています」と同意しているように、『西部戦線異状なし』を介して、一つの「典型的な」戦争体験なるものが前線世代の間で共有されていたことだ。これまでの議論から明らかのように、前線と銃後の断絶の語りを含めたこの虚構の「典型的」は、『一九〇二年生まれ』を「同年齢の運命」として、別の「典型的な」戦争体験を語り始めた若い世代を前に、前線世代が構築した一種の防壁ないし対抗武器に他ならなかったのである。

4 戦争ブームと世代間抗争

以上のように、ヴァイマル時代における大戦の語りは、街頭での政治暴力や世代間抗争の表面化によつてそのつど変容を余儀なくされており、一個の戦争ナラティブが完全に勝利することは遂になかった。だがこうした戦争の語りの流動性は、従来の研究では等閑視される場合が多く、むしろフレックスやユンガーを当時の代表的な言説として取り上げ、それらを回顧的に固定化する傾向が強かつたように見える。あるいは、その流動性に着目しながら、それをたとえば「詩的マトリックス」

の変化と捉え、その変容の背景となる社会的動因が考察から脱落している場合もある。⁶⁸⁾ いずれにせよ、こうした研究上の視点の欠落から、たとえばヴァイマル末期に突如として湧き起こった戦争ブームの原因も、「社会的経験の一部として容易に位置づけられない大戦体験の深刻さ」により、「社会的実践の提言へと熟すまでに一〇年の歳月を要した」という心理的理由か、「アヴァンギャルドの勝利」、「アイロニーと不安」、「途方に暮れた自己憐憫」などのような、時代の雰囲気の産物として説明されてきた。⁶⁹⁾

だが、今まで論じてきたように、ちょうどこの時期に前線世代と戦時青年世代の争いが表面化し、戦争の記憶をめぐる闘争が激しさを増していたことも、このブームをもたらす一因になったと考えられる。実際、相対的安定期には前線世代の間でも、戦争小説による過去の回想を「もう十分」だとして、「前を見据える」ことを求める主張が出ていた一方、わずか数年後のヴァイマル末期には、他ならぬこの前線世代から、「戦争が心に生じさせる大いなる映像」を描いたレマルクに匹敵するようないな、「偉大な戦争本」を待望する声が挙がっている。⁷⁰⁾ 若い世代の攻撃に曝され始めた彼ら前線世代にとって、過去の大戦の見直しこそ、そのアイデンティティを再確認し、世代としての団結をさらに強化させる最も有効な手段だったのである。

他方、「年長世代の犠牲者」として世代意識を形成した戦時青年世代も、戦争自体を否定したわけではないことは強調されねばならない。むしろ、一九三一年の社会民主党の党大会で、「戦争を繰り返すな！(Nie wieder Krieg!) これは青年にわずかな印象しか与えない」と慨嘆されたように、戦争への憧憬は彼らの間でも強烈に存在していた。⁷¹⁾ だからこそ彼らの中には、前線世代を同じ「二〇世紀の人間」⁷²⁾ あるいは

は「若き世代」として、自己の陣営に取り込もうとする動きすらあったのだ。⁷³⁾ この二つの世代の同盟は、まもなくヒトラー(1889-1945)率いるナチス国家によって達成され、戦時青年世代は——カルテンブルンナー(1903-1946)やハイドリヒ(1904-1942)、そしてアイヒマン(1906-1962)をその典型として——官僚機構を始め、国家・社会の諸領域で第三帝国を支えながら、やがて第二次世界大戦を迎えることになる。⁷⁴⁾

注

- (1) モードリス・エクスタインズ(金利光記)『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生——』TBSブリタニカ、一九九一年、二〇〇—二二三頁。
- (2) Philipp Witkop (Hg.), *Kriegsbriefe gefallener Studenten*, München, 1928, S. 335.
- (3) ソール・フリードランダー編(上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳)『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社、一九九四年。
- (4) Ernst Schulin, „Weltkriegserfahrung und Historikerreaktion“, Wolfgang Küttler, Jörn Rüsen, Ernst Schulin (Hg.), *Krisenbewußtsein, Katastrophenerfahrungen und Innovationen 1880-1945 (Geschichtsdiskurs, Bd. 4)*, Frankfurt a. M., 1997, S. 165-188.
- (5) エクスタインズ、一九九一年、三九三—三九六頁。
- (6) Ernst Jünger, *In Stahlgewittern. Aus dem Tagebuch eines Stoftruppführers*, 2. Aufl., Berlin, 1922 [erst abgedruckt 1920], S. V. [Vorwort zur 1. Aufl.]
- (7) Hans-Harald Müller, *Der Krieg und die Schriftsteller. Der Kriegroman der Weimarer Republik*, Stuttgart, 1986, S. 28f.

- (8) ドイツ人戦死者一九〇万八七六人のうち、三万四八三六人は海軍の軍人で、一一八五人はドイツの旧植民地に滞在していた。さらに、大戦中にはおよそ八万人のドイツ人兵士が捕虜として捕えられており、彼らの大多数は一九一九年秋から一九二〇年夏にかけてドイツに帰還した²⁶ (Richard Bessel, "The 'front generation' and the politics of Weimar Germany", Mark Roseman (ed.), *Generations in Conflict. Youth revolt and generation formation in Germany 1770-1968*, Cambridge University Press, 1995, p. 124f.)°
- (9) *Ibid.*, p. 135.
- (10) Jürgen Reulecke, „Utopische Erwartungen an die Jugendbewegung 1900-1933“, Wolfgang Hardtwig (Hg.), *Utopie und politische Herrschaft in Europa der Zwischenkriegszeit*, München, 2003, S. 212.
- (11) Mark Roseman, „Generations als 'Imagined Communities'. Mythen, generationelle Identitäten und Generationenkonflikte in Deutschland vom 18. bis zum 20. Jahrhundert“, Ulrike Jureit, Michael Wildt (Hg.), *Generationen. Zur Relevanz eines wissenschaftlichen Grundbegriffs*, Hamburg, 2005, S. 191f.
- (12) Robert Wohl, *The Generation of 1914*, Harvard University Press, 1979.
- (13) ハンス・モムゼン (住沢とし子訳) 「ワイマル共和国における世代間抗争と青年の反乱」『思想』第七一一号、一九八三年、九七—一一二頁²⁷。
- (14) Walter Benjamin, „Die religiöse Stellung der neuen Jugend“, *Die Tat*, Jg. 6, 1914/15, S. 210-212.
- (15) Barbara Stambolis, *Mythos Jugend – Leitbild und Krisensymptom. Ein Aspekt der politischen Kultur im 20. Jahrhundert*, Schwabach/Ts., 2003, S. 11f.
- (16) ジョン・R・ギリス (北本正章訳) 『若者』の社会史——ヨーロッパにおける家族と年齢集団の変貌——』新曜社、一九八五年、一四九—二〇六頁。
- (17) 第一次世界大戦前の青年運動については、田村栄子『若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史——』名古屋大学出版会、一九九六年、四七—一一八頁。
- (18) „Freideutscher Jugendtag 1913. Jahrhundertfeier auf dem Hohen Meisner am 11.-12. Oktober“ [Einladungsflugblatt zur „Jahrhundertfeier auf dem Hohen Meisner“], Winfried Mogge, Jürgen Reulecke (Hg.), *Hoher Meisner 1913. Der Erste Freideutsche Jugendtag in Dokumenten, Deutungen und Bildern*, Köln, 1988, S. 68.
- (19) 青年運動のイデオログ、グスタフ・ヴェユネケン (1875-1964) によれば、青年期は単に成人への準備期間ではなく、「それ固有のかけがえのない価値、固有の美、そしてその結果として自己の人生に対する権利」独自のやり方を展開させる可能性への権利も持ち合わせる²⁸ (Gustav Wyneken, *Der Gedankenkreis der Freien Schulgemeinde – Dem Wandervogel gewidmet*, Leipzig, 1913, S. 10f.)°
- (20) „Freideutscher Jugendtag 1913“, Mogge, Reulecke (Hg.), 1988, S. 68.
- (21) Zit. nach Winfried Mogge, „Wandervogel, Freideutsche Jugend und Bünde. Zum Jugendbild der bürgerlichen Jugendbewegung“, Thomas Koebner, Rolf-Peter Janz, Frank Trommler (Hg.), „*Mit uns zieht die neue Zeit*“, *Der Mythos Jugend*, Frankfurt a. M., 1985, S. 183f.
- (22) 「ランゲマルクの青年」に「*Langemarck*」, Uwe-K. Kretsen, „Die Jugend von Langemarck“. Ein poetisch-politisches Motiv der Zwischenkriegszeit“, ebd., S. 68-98; Bernd Hüppauf, „Langemarck, Verdun and the Myth of a New Man

- in Germany after the First World War”, *War and Society*, Vol. 6, No. 2, 1988, pp. 70-103, cit. from p. 70; この神話が形成された背景に「軍隊内部での急速な熱狂の後退を見たのはモッセである(シ)ヨージ・L・モッセ(宮武美知子訳)『英霊——創られた世界大戦の記憶——』柏書房、二〇〇二年、八〇頁)。
- (23) Hüppauf, 1988, p. 74.
- (24) Zit. nach Kerlsen, 1985, S. 77.
- (25) Hüppauf, 1988, p. 98. [Note 10]
- (26) Justus H. Ulbricht, „Der Mythos vom Heldenod: Entstehung und Wirkungen von Walter Flex’, *Der Wanderer zwischen beiden Welten*“, *Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung*, 16, 1986/87, S. 111-156, hier, S. 111; ただしフレックス自身は青年運動に参加したことはなかった。
- (27) ニーチェのツアラトウストロヤゲーテの遍歴者の喩えは、Walter Flex, *Der Wanderer zwischen beiden Welten. Ein Kriegserlebnis*, 13. Aufl., München, 1918 [erst abgedruckt 1917], S. 6f.
- (28) Ebd., S. 13.
- (29) Ebd., S. 84f.
- (30) Ulbricht, 1986/87, S. 152.
- (31) Flex, 1918 [1917], S. 41.
- (32) Ebd., S. 103.
- (33) Ulbricht, 1986/87, S. 147f.
- (34) Dirk Schumann, „Einheitssehnsucht und Gewaltakzeptanz. Politische Grundpositionen des deutschen Bürgertums nach 1918 (mit vergleichenden Überlegungen zu den britischen *middle classes*)“, Hans Mommsen (Hg.), *Der Erste Weltkrieg und die europäische Nachkriegsordnung. Sozialer Wandel und Formveränderung der Politik*, Köln, 2000, S. 83-105, hier zit. nach S. 100.
- (35) Bernd A. Rusinek, „Krieg als Sehnsucht. Militärischer Stil und „junge Generation“ in der Weimarer Republik“, Jürgen Reulecke (Hg.), *Generationalität und Lebensgeschichte im 20. Jahrhundert*, München, 2003, S. 139.
- (36) 川合全弘「自己肯定と自己否定に揺れるドイツ国民意識——ドイツにおけるエルンスト・ユンガー受容の現在——」同著『再統一ドイツのナシヨナリズム——西側結合と過去の克服をめぐる——』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、二一五頁から引用；シェフリー・ハーフ(中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳)『保守革命とモダニズム——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治——』岩波書店、一九九一年、二二九頁。
- (37) Jünger, 1922 [1920], S. 16, 20, 3, 80, 154.
- (38) Flex, 1918 [1917], S. 10.
- (39) Jünger, 1922 [1920], S. 62.
- (40) Ebd., S. 136.
- (41) 星乃治彦「暴力・街頭・抵抗」田村栄子・星乃治彦編『ヴァイマル共和国の光芒——ナチズムと近代の相克——』昭和堂、二〇〇七年、二五八—二五九頁。
- (42) Dirk Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918-1933. Kampf um die Straße und Furcht vor dem Bürgerkrieg*, Essen, 2001, S. 33, 51f.
- (43) Ebd., S. 89f. hier zit. nach S. 92.
- (44) Bernd Weisbrod, „Gewalt in der Politik. Zur politischen Kultur in Deutschland zwischen den beiden Weltkriegen“, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg. 43, 1992, S. 392.

- (45) Rolf Peter Sieferle, *Die Konservative Revolution. Fünf biographische Skizzen*, Frankfurt a. M., 1995, S. 139; Bernd Weisbrod, „Kriegerische Gewalt und männlicher Fundamentalismus. Ernst Jüngers Beitrag zur Konservativen Revolution“, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg. 49, 1998, S. 559.
- (46) Müller, 1986, S. 221.
- (47) Schumann, 2001, S. 94f.; だがそのわずか一年後には、市民層や社会民主主義系の新聞は共産主義者を犯罪者集団と断じ、「モスクワの吸血鬼」と罵倒している。この時期の彼らにとって共産主義者の生命を容赦すことは、もはや「自殺的な感傷」ではなかった (ebd., S. 130f.)。
- (48) Jünger, 1922 [1920], S. 137; だが『内的体験としての闘争』(一九二二年)では既にユンガーの英雄像は変貌し、「闘争の中で動物性が秘められた怪物として魂の奥底から這い上がってくる」者、「血の快楽」を知る者となる (Ernst Jünger, *Der Kampf als inneres Erlebnis*, Berlin, 1922, S. 7-9)。
- (49) Erich Maria Remarque, *Im Westen nichts Neues*, 13. Aufl., Köln, 2006 [erst abgedruckt 1929], S. 117, 119, 127, 114, 129. (秦豊吉訳『西部戦線異状なし』新潮社、一九五五年、一九〇、一九四、二〇九、一八五、二二五頁)
- (50) Flex, 1918 [1917], S. 53; Jünger, 1922 [1920], S. 65.
- (51) デートレフ・ポイカート (小野清美・田村栄子・原田一美訳)『ワイマル共和国——古典的近代の危機——』名古屋大学出版会、一九九三年、一三二—一四二—二二七—二七—一八四頁。
- (52) Detlev Peukert, „The Lost Generation: Youth Unemployment at the End of the Weimar Republic“, Richard Evans, Dick Geary (eds.), *The German Unemployment. Experiences and Consequences of Mass Unemployment from the Weimar Republic to the Third Reich*, London/Sydney, 1987, p. 173-175.
- (53) ポイカート、一九九三年、七七頁。
- (54) Richard Bessel, „The Great War in German Memory: The Soldiers of the First World War, Demobilization, and Weimar Political Culture“, *German History*, Vol. 6, No. 1, 1988, p. 22f., 29-31.
- (55) 彼らはおもにナチ党と共産党の党員や票田となった。たとえばナチ党は党員の平均年齢が一九二五年に二九才、一九三二年には三五才と、他党に比べ際立って「若い政党」であり、当時これに比肩しうるのは共産党のみだった (Michael H. Kater, „Generationskonflikt als Entwicklungsfaktor in der NS-Bewegung vor 1933“, *Geschichte und Gesellschaft*, Jg. 11, Heft 2, 1985, S. 230f.)。
- (56) Schumann, 2001, S. 140, 241, 282, 228f., 244.
- (57) Fritz Rosenfeld, Rez. von E. Glaeser, „Jahrgang 1902“, *Die Bicherwart*, Jg. 1928, S. 327f.; Heinz Holler, „Naturgeschichte einer Generation? Zu Glaesers ‚Jahrgang 1902‘“, *Widerstand*, Jg. 4, 1929, S. 205; Erich Franzen, Rez. von E. Glaeser, „Jahrgang 1902“, *Die Literarische Welt*, Jg. 4, No. 42, 1928, S. 5.
- (58) Rosenfeld, 1929, S. 327.
- (59) Ernst Glaeser, *Jahrgang 1902*, Berlin, 1928, S. 323.
- (60) Zit. nach Hans Thomas [i. e. Hans Zehner (1899-1960)], „Absage an den Jahrgang 1902“, *Die Tat*, Jg. 21, 1929/30, S. 743, 745, 748; Siegfried Kracauer (1889-1966), „Neue Jugend?“, *Neue Rundschau*, Bd. 42, 1931, S. 138-140; Edgar J. Jung (1894-1934), „Die Tragik der Kriegsgeneration“, *Städtische Monatshefte*, Jg. 27, 1930, S. 528.
- (61) Axel Eggebrecht (1899-1991), „Paul Bäumer, der deutsche Unbekannte Soldat“, *Die Weltbühne*, Jg. 25, Erstes Halbjahr, 1929, S. 212f.; Ernst Toller (1893-1939), Rez. von „Im Westen nichts Neues“, *Die Literarische Welt*, Jg.

5. No. 8, 1929, S. 5.

- (62) Axel Eggebrecht, „Gespräch mit Remarque“, *Die Literarische Welt*, Jg. 5, No. 24, 1929, S. 1.

- (63) “The End of War? Correspondence between Erich Maria Remarque and General Sir Ian Hamilton”, *Life and Letters*, Vol. 3, No. 18, 1929, p. 403, 405f., 408, 405; 傍点は引用者による。

- (64) 一九一六年八月に徴集され、一九一七年六月に戦闘を初体験したレマルクは、既に一九一七年八月三日から一九一八年一〇月三十一日まで入院していたという。つまり戦闘の初体験から入院までは二ヶ月程度で、しかもその負傷は——真偽は定かでないが——本国へ送還されるために、レマルク自身が傷つけたものだという証言もある（エクスタインズ、一九九一年「三七八頁」）。

- (65) Eggebrecht, „Gespräch mit Remarque“, 1929, S. 1.

- (66) Fritz Dietrich, Rez. von „Jahrgang 1902“, *Die Literatur*, Jg. 31, Heft 3, 1928, S. 168.

- (67) たとえばロイレッケは、大戦中における兵士の表象の変貌を論じる一方で、大戦後の戦争の語りをユンガーに代表させ、その連続性をスターリン・ブロード戦まで設定している（Jürgen Reulecke, „Vom Kämpfer zum Krieger. Zum Wandel der Ästhetik des Männerbildes während des Ersten Weltkrieges“, ders., „*Ich möchte einer werden so wie die...*“ *Männerbinde im 20. Jahrhundert*, Frankfurt/New York, 2001, S. 89-101; ders., „Neuer Mensch und neue Männlichkeit. Die ‚junge Generation‘ im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts“, *Jahrbuch des Historischen Kollegs*, 2002, S. 109-138）。

- (68) Müller, 1986, S. 36-93.

- (69) 川合全弘「戦争体験、世代意識、文化革新——ドイツ前線世代につ

らっての一考察——」同著、二〇〇三年、二〇三頁；エクスタインズ一九九一年「三七四—四〇三頁」。

- (70) Kurt Tucholsky (1890-1935), „Vorwärts –“, *Die Weltbühne*, Jg. 22, Erstes Halbjahr, 1926, S. 1-4; Hans Thomas [Hans Zehrer], „Wohin rollt die Zeit?“, *Die Tat*, Jg. 22, Heft 2, 1930, S. 81f.

- (71) Zit. nach Rusinek, 2003, S. 127.

- (72) Urmann von Elerlein (1902-?), „Absage an den Jahrgang 1902?“, *Die Tat*, Jg. 22, Heft 3, 1930, S. 202-206; E. Günther Gründel (1903-?), *Die Sendung der Jungen Generation. Versuch einer umfassenden revolutionären Sinnleitung der Krise*, München, 1932, S. 60-63, 64f. und passim.

- (73) Michael Wildt, *Generation des Unbedingten. Das Führungskorps des Reichssicherheitshauptamtes*, Hamburg, 2003; Ulrich Herbert, *Best. Biographische Studien über Radikalismus, Weltanschauung und Vernunft, 1903-1989*, Bonn, 1996.

(むらかみ ひろあき・関西大学大学院)